

オペラ『西部の娘』とアメリカーナ

玉崎紀子

オペラ『西部の娘』(La fanciulla del West)⁽¹⁾はアメリカを舞台にした唯一のグランド・オペラでイタリア・オペラの代表的作曲家プッチーニ(Giacomo Puccini)のオペラの中ではあまり有名ではないのだが、アメリカでは初演以来ずっと人気を保ち続けており、イタリア語の題ではなく、The Girl of the Golden Westという原作英語題名で言及され愛されている。またメトロポリタン歌劇場が初めて新作オペラを披露した世界的なプレミア⁽²⁾でもある初演は後にのべるように作曲家プッチーニにとっても、メトロポリタン歌劇場にとっても大成功で、メトロポリタンはそれ以降初演を行える世界的オペラ・ハウスとして通用することになった⁽³⁾。その初演では世紀の名テノール、カルーソーによって歌われたヒーローのジョンソン(Johnson)役を50-60年代には次の世代の有名なテノール、マリオ・デル・モナコとディ・ステファノーが演じ、現在はプラシド・ドミンゴ(Placido Domingo)のお気に入りの持ち役とあって、彼を主演にして1974年以来⁽⁴⁾世界中で上演され続けている。イギリスのロイヤル・オペラでは初演に続き翌年の公演以来65年ぶり、ミラノ・スカラ座ではイタリア・オペラの日本公演でも演じたマリオ・デル・モナコ以来の27年ぶりという公演ながらもドミンゴ人気もあって大好評で迎えられ公演の質も高かったことからその舞台がAVソフト化された。そこでここ10年間にこの世界的名歌劇場のライブが次々に発売され、さらに1993年10月末にメトロポリタン・オペラ公演録画のものが加わり、とうとう3種類のレーザー・ディスクで鑑賞可能というどんな有名オペラにも負けないAVソフトの質を誇り、また最近のドミンゴ主演オペラでは最も多くAV化された作品となりトレンドなオペラとなった。特にこの最近発売のものは、1992年のシーズン開幕を飾った新演出の舞台であり、奇しくもマリオ・デル・モナコの息子であるジャンカルロ・デル・モナコ(Giancarlo del Monaco)⁽⁵⁾の新演出がこれまでにない、喜劇的要素を取り入れて、アメリカ西部劇らしい原作の雰囲気にも最も忠実であることとジョンソン役のドミンゴ以外にも、彼とヒロインを張り合う保安官役にシェリル・ミルズ(Sherrill Milnes)という容姿もぴったりの一流バリトン歌手を得ている点だけでも注目すべきなのに、さらにタイトル・ロールを演じるバーバラ・ダニエルズ(Barbara Daniels)が演技も歌唱力もドミンゴを圧倒するほど抜群なので、アメリカのオペラとして必見のものと言える。ただしニューヨーク・タイムズの初日の批評は絶賛だったのに、日本ではたいして評価されていない⁽⁶⁾。日本での低い評価はこのいかにもアメリカ的なオペラに対する理解のなさ、特に原作から受け継がれたアメリカ文化の伝統を表すオペラという点が評価されないためと思われる。ほぼ英語原作戯曲どおりの台詞が歌われているこのオペラをある意味では

原作の舞台上演の一つの変形として見なし、とりわけアメリカで愛されているこのオペラをアメリカ文化を表す舞台芸術として、ここで紹介したいと思う。

まずこのオペラの原作から簡単に紹介したい。

『西部の娘』の原作はデイヴィッド・ベラスコの1905年ブロードウェイ初演の戯曲 *The Girl of the Golden West* (1905年執筆。1929年初版発行)である⁽⁷⁾。現在ではプッチーニ (Giacomo Puccini [1858-1924])⁽⁸⁾のオペラ作曲家としての名声の方が、原作者デイヴィッド・ベラスコ (David Belasco [1853-1931]) よりはるかに勝っているが、19世紀末から20世紀初頭の演劇界におけるベラスコの華々しい名声はプッチーニに勝るとも劣らないものであった。しかし彼の死後生前の名声とは裏腹に、19世紀的ロマンティックなメロドラマ戯曲は彼の優れた演出なしには時代遅れとなるばかりで軽視され始め、現在では彼の戯曲上演はめったになされない。このオペラとやはり彼の戯曲からオペラ化された『蝶々夫人』に接するか、または彼の生存中に何度も映画化された幾つかのハリウッド映画によって彼の戯曲上演を推測するしかない。勿論原作戯曲は読むことができるし、彼の350以上の上演作品⁽⁹⁾とその上演細目の膨大な資料を保存するという目的で設立されたニューヨーク公立図書館で演出資料にも接することができる⁽¹⁰⁾。

1. 原作 *The Girl of the Golden West* (1905) by David Belasco

第1幕 (317-349)⁽¹¹⁾

砂金掘りの荒くれ男達しか知らぬ酒場の女主人 Minnie (ミニー) は Monterey (モンタレイ) の町に出かけた途中で一人の紳士に出会う。この旅から帰った後彼女は保安官 Rance (ランス) の執拗な求愛に目もくれない。しかし「あなたを決して忘れない」と言った見知らぬ男は長い間現れない。ある日ウィスキーの水割りと言う洒落た飲物を要求する変な客と聞いて、生のまま飲めないなんて男じゃないと彼女は言ったのだが、その客 Johnson (ジョンソン)こそ忘れられないあの男だった。酒場の男達と群を抜く男ぶりと紳士的な振る舞い、言葉遣いに誰とも踊らなかったダンスを彼と楽しみ、ミニーはもう一度恋に落ちる。砂金をねらう追い剥ぎ強盗 Ramerrez (ラメレス) を追って運送会社の Ashby (アシュビー)、保安官、鉱夫達が消えた後、二人きりで話し、ミニーは精神的に高められたと感じる。しかし実は盗賊ラメレスである彼はミニーが女主人と知り、酒場の強奪計画を止めたのである。砂金を苦勞して掘る鉱夫達へのミニーの共感、彼女の生命を賭けて砂金を守る勇敢さ、鉱夫達が家族のために働いて得た砂金を奪うラメレスを許せないという彼女の気持ちを知り、彼は引きつけられてしまう。そこで彼は追われている危険を承知でその夜酒場がはねた後彼女の山小屋で会う約束をする。

第2幕 (349-381)

初めに山小屋でミニーの女中でインディアンの Wowkle (ウォークル) が恋人で赤ん坊の父親である Jackrabbit (ジャックラビット) と結婚の約束をするコミック・リリーフがある。酒場から帰宅したミニーは髪に赤いバラを飾り、新しい靴をはきショールを肩にかけ香水をふりかけ手袋まではめて精一杯のお洒落をするので、やって来たジョンソンに「出かけるところだったの」と言われる始末。

彼女を抱きしめよう、キスしようとするジョンソンに恋しているくせに避け続ける彼女だが、女中が帰って二人になった途端「キスはあなたのものよ」と彼の胸に飛び込む。キスを交わした後、モンタレイで初めて会った時に「彼は紳士だ。彼が望めば結婚するわ」と思ったのだと打ち明けられ、ミニーのあまりの純粋な愛を知って一旦は無法者の自分を思い帰ろうとするが、雪嵐に閉じ込められ、山小屋で夜を明かすことになる。そして改心した彼はミニーにこの地を捨てて遠くへ見知らぬ男の自分について来てくれるかと聞く。女心のありったけをこめて「あなたのような立派な紳士にふさわしい女じゃないけれど、どこまでもついて行く」というミニー。そこへラメレスを追って保安官達がやって来て、ラメレスの女 Nina (ニーナ) が冷たくなった愛人に腹をたて、報償金めあてに彼を売った。なんとラメレスはミニーが酒場で身元保証しダンスを踊った男ジョンソンだ。彼らを帰した後ミニーは初めてのキスを捧げたのに、愛人がいたなんて許せないと雪の中へ彼を追い出す。そのとたん響く銃声。戸を開けると小屋の中へよろめき倒れ込むジョンソン。瀕死の彼を見て、お尋ね者であっても彼こそ唯一の愛する人なのだと一瞬の内に認識するミニー。ランスの叫び声に彼を屋根裏に吊り上げ梯子で登らせ隠すが、探しに来たランスが帰ろうとした時彼の手の上に上から血が滴り落ち、見つかってしまう。彼のための命ごいが無益と知って、ポーカーの3回勝負で勝った方がジョンソンの命を自由にできるという賭博をしようと彼女は言う。しかし最後の勝負に負けた時、カードをすり替えて彼女は勝ち、ランスは去る。

第3幕 (381-402)

1週間後傷を癒したジョンソンはお尋ね者であるこの地方を去り、東部で新生活を始めようと彼女と約束して先に出発する。その朝ミニーは1週間ぶりに山を下り、雪嵐に閉じ込められた時の恒例の読み書き算数の学校を開く。彼女を先生として崇拝する生徒としての鉱夫達とのやりとりでこの幕は喜劇的で楽しい雰囲気醸し出す。しかし彼女がもうすぐこの地を去っていくと言い、泣き出すので教室は騒然となり学校は中断してしまう。その頃ジョンソンは彼の馬を見張っていたアシュビーに捕えられ、絞首刑にされることになるが、酒場のバーテン、Nick (ニック) がラメレスにミニーと最後の一目を許すべきだと言ひだし、彼女は何も知らされず、陰からの監視付で彼と会う。この盗み聞きによりミニーの彼に対する深い愛を知った鉱夫達は、恋人が捕まると気付き「彼を殺させないわ」と叫ぶミニーにまず Sonora (ソノーラ) がジョンソンを釈放としようと言ひ出し、他の鉱夫達も陪審員として賛成する。

第4幕 (402-3)

1週間後の朝焼けの中で、だんだん遠く懐かしいシエラの山脈、愛するカリフォルニアの風景を振り返り感傷的に涙ぐむミニーに「約束の地は未来にあるんだよ」とジョンソンが言い、二人は一緒にカリフォルニアを去って行く。

この作品はメロドラマとして分類されるが、実はオペレッタやバーレスクに観客を奪われていたメロドラマ終焉期にベラスコが正統的古典劇を目指して、ブロードウェイ演劇の回復を図って執筆した作品である⁽¹²⁾。そこで勧善懲悪のメロドラマと異なり保安官も砂金強盗ラメレスでさえも単純に悪人

とは言えない複雑な内面をもち、悪人がいないし、悪事の舞台化や悪人を捕らえる活劇もない。活劇と言える血の滴りにより、保安官がラメレスに気づく場面も作者は特に“easily and naturally”に抑えて演ずるように指示を書き⁽¹³⁾、活劇になるべきラメレス捕縛の場面も台詞で暗示されるだけで演技はない。同様にジョンソンとミニーが共感を持って手を取り合うシーンでは“not heroically but very simply” (368) とト書がある。ヒーロー、ジョンソンは常に礼儀正しく、美しい言葉を話す、上流紳士として舞台上に現れ、ラメレスの批判されるべきであるが魅力的でもある向こうみずな無法者の性格は人物像に陰影を与えるものとして描かれ、盗賊としての台詞は、1幕の部下のカストロ (Castro) とのこっそりと二言三言交わす会話だけである。またメロドラマの常である、孤児の身元が分かり泣かせる場面に似たジョンソンがラメレスと告白する場面も扇情的にせず、庶民的共感を呼ぶ、リアリズムの手法で描かれる。従って感傷的な場面はあるとしても、全体は明るい未来を信じるコメディの伝統にあり、「アメリカの夢」へ向って進む幸福な結末になっている⁽¹⁴⁾。

この劇は1905年10月3日 Belasco Theatre, Pittsburgh, Pa. で幕を開け、1905年11月14日 Belasco Theatre, New York の Broadway 初演で大成功をおさめた⁽¹⁵⁾。Belasco Theatre は連日満員で1年以上のロングランを続けた後、新作の *The Rose of the Rancho* (「牧場のバラ」) に場所を譲り、1907年1月に地方巡業後ニューヨークでの凱旋公演を行っていた⁽¹⁶⁾。その1907年1月、『蝶々夫人』のメトロポリタン歌劇場での初演及び彼のオペラ連続公演に招待され初渡米したプッチーニが、次のオペラの題材を求めてブロードウェイで上演中のベラスコの3作品を観劇し、*The Rose of the Rancho* とどちらがいか悩んだ末結局 *The Girl of the Golden West* をオペラ化することにした⁽¹⁷⁾。こうして『西部の娘』が1910年メトロポリタン・オペラ初演を迎えることとなった。すでにベラスコ執筆 (ジョン・ルーサー・ロング (John Luther Long) の短編小説を戯曲化したもの)、演出の *Madame Butterfly* のロンドン公演に感激し楽屋にベラスコを訪ね、オペラ化を申し込んだといういきさつ⁽¹⁸⁾もあり、その上友人 Sybil Seligman に勧められてベラスコのこの新作 *The Girl of the Golden West* に渡米前から関心を抱いてもいた⁽¹⁹⁾。英語がほとんど分からなかったプッチーニだが⁽²⁰⁾、ヒロイン、ミニーの様々な喜怒哀楽の感情を見せる魅力的な性格に感銘を受け、オペラ化した自分の作品『西部の娘』のヒロインを“La Girl, mia Girl”と呼んで愛したという⁽²¹⁾。また『蝶々夫人』、『トスカ』、『マノン・レスコー』といった非常に似た傾向のヒロインを主人公にすえたオペラを書き続けたプッチーニに対し、ベラスコもまた *Madame Butterfly*, *Du Barry*, *The Darling of the Gods*, *Adrea* と愛に殉じたヒロインを書き続けた⁽²²⁾ことから明かなように、彼ら二人には共通するヒロイン像の好みがあったというべきであろう。しかしプッチーニは『西部の娘』を「アメリカの『ラ・ボエーム』、但し、アメリカらしくより激しく壮大」⁽²³⁾と語っていることから明かなように『ラ・ボエーム』の「しみじみとした庶民の哀感」に似たヴェリズモ・オペラとして描いている。総合芸術オペラはベラスコの劇をかすませる程不滅となったのだが、オペラ化によりミニーの陽気なアメリカ娘らしい特質は大幅に聖母マリア化され、ベラスコが捨てたメロドラマに戻ってしまい、原作の喜劇的な良さ、楽天的なアメリカの夢といった特徴が失われている。

II. オペラ: *La fanciulla del West* (1910)

作曲: Giacomo Puccini (1868–1924); 1908–1910. (初演時 44 歳)

台本: ザンガリーニ (Carlo Zangarini)、チヴィニーニ (Guelfo Civinini)

1 幕 60 分; The Polka saloon, at sunset. (酒場「ポルカ」)

2 幕 45 分; Minnie's cabin, later that evening. (ミニーの山小屋)⁽²⁴⁾

3 幕 25 分; A clearing in the Californian forest at dawn. (森林の中の空き地)

初演 (New York: Metropolitan Opera House, 1910 年 12 月 10 日)⁽²⁵⁾ は 55 回⁽²⁶⁾ のカーテン・コールでプッチーニにとって最大級の成功となった初演であった。またメトロポリタンの歴史にも他に例を見ないほどの熱狂と喝采をかちえた。入場券には 30 倍のプレミアムがついたというし、何から何までけたはずれの記録を作りだした⁽²⁷⁾。

初演: 1910 年 12 月 10 日

指揮: Arturo Toscanini (1867–1957) 43 歳

Minnie (Soprano): Emmy Destinn (1878–1930) 32 歳

Dick Johnson (Tenor): Enrico Caruso (1873–1921) 37 歳

Jack Rance (Bariton): Pasquale Amato (1878–1942) 32 歳

指揮者トスカニーニは名指揮者である上に、プッチーニの信頼厚かったと言うし、キャストも名声ある伝説的な歌手達、それにメトロポリタンらしく “No expense had been spared”⁽²⁸⁾ ということで、素晴らしかったのも当然だが、さらに原作者ベラスコがつっ立って歌うだけで演技できないオペラ歌手達の演技指導をし⁽²⁹⁾、その結果イタリア人による台本のアメリカ西部に関する間違いを正す演出指導によって、ベラスコのブロードウェイ劇にも劣らぬ、アメリカ西部劇としての真性さを持つことになった。「メトでこれ以上リアリスティックな上演はこれまでなかった。プロダクション全体にわたってベラスコらしいタッチが見られた」⁽³⁰⁾ と写実的演出が初演翌日の劇評で賞賛されたぐらいだから観客の熱狂的な喝采も無理はない。その後素人うけのする曲で有名なプッチーニにしては甘く美しい旋律が少ないこともあって、他の歌劇場ではめったに上演されないこの『西部の娘』だが、メトロポリタンだけはジョンソンを、マルティネッリ (1929)、リチャード・タッカー (1961)、フランコ・コレルリ、ランス役をローレンス・ティベット (1929)、アンセルモ・コルツァーニ (1961)、ジャン・ジャコモ・ゲルフィ、ミニー役はマリア・イエリツァ (1929)、レオンティン・プライス (1961)、ドロシー・カスティン、エリナー・スティーバー、レナータ・テバルディという歌手達に受け継がれて歌われ、10 年、29 年、61 年、92 年と初演から 2–30 年おきには必ず新演出でシーズン開幕を飾るのがほぼ伝統となっている⁽³¹⁾。すなわちアメリカにとって、メトロポリタンにとって、記念すべき時には必ず上演される愛すべきオペラとなるのが、『西部の娘』なのである。

ここで先に述べたように現在視聴できる 3 種類の AV ソフト資料についてそれぞれの特長と見所を記しておきたい。

資料:

1. Royal Opera House: Covent Garden 版 (1982)
2. La Scala 版 (1991)
3. Metropolitan Opera House 版 (1992)

1. Covent Garden (1982年11月12日収録)

指揮: Nello Santi

演出: Piero Faggioni

装置: Ken Adam

衣装・照明: Piero Faggioni

Minnie: Carol Neblett (1946-) 36 歳

Johnson: Placido Domingo (1941-) 41 歳

Jack Rance: Silvano Carroli (1939-) 43 歳

『西部の娘』は1911年 Covent Garden 初演, 続いて1912年に上演された。65年ぶりの1977年, 1978年の公演が好評で録画となった⁽³²⁾。キャロル・ネブレットとドミンゴの組み合わせは1974年イタリア、トリノのレジオ劇場で『西部の娘』を初上演した。この好演でネブレットはアメリカ以外で歌うようになり⁽³³⁾、ドミンゴはこの初演から毎年のように各地で『西部の娘』を歌ってこの作品の復活を果たした。この版の魅力はなんといってもドミンゴが若く美声なので登場後すぐミニーを口説き、忘れていないと歌う高音がきれいに伸びて魅力的な事に現れているように、プレイボーイとして自信を持つ陽気な若者、しかも甘い感じが全編の彼の歌唱に現れ酒場の男達と違う上流紳士風のハンサムな男という設定にぴったり合っていることである。従ってこのオペラの唯一の有名なアリアとも言える『自由の歌』はこれで聞くべきであろう。またジョンソン役としての服装が19世紀後半の若い紳士が好んだ皮革かビロードで縁取りされたジャケットにネクタイでなくリボンを結ぶといった流行に従っており、それが伊達男らしい様子を補強している。登場人物で一人だけ上流の人の集まるサクラメント (Sacramento)⁽³⁴⁾で買った服を着ていて、絶対に彼だけは盗賊ラメレスに見えないという原作の描写に一番忠実な服装である。彼が上流紳士に見え、ミニーが釣り合わないけれどと、夢中になるのが分かるのは、この版だけである。他の版では実は盗賊、西部男というところに重点がおかれていて流行の服の洒落者と見えかねる。彼が上流紳士と思うからこそ、ミニーの “we’re kind of rough up here” (346), “I don’t know nothin’ and I never knowed it till tonight.” (348) と対比して語る原作台詞があるのに、オペラではヴェリズモ・オペラ的にただ「貧しい無学な娘」に変えている。ミニーが自分に手の届かぬ上品な上流紳士と思いこみジョンソンに憧れるが、実は彼女より底辺のお尋ね者だったというこの落差を読みとることが重要である。上流紳士と盗賊との落差の大きさ、また変装の面白さがこの劇の一つの楽しみだからである。ただの西部男では変装がなく、彼の identity の謎という劇的面白さを失ってしまう。歴史に忠実なメトロポリタン版はしかし、黒地に金ラメの刺繍

や金ボタンのウエスタン・シャツで、メキシコの祭や洒落者を連想させ、メキシコ戦争によって生じた山賊、盗賊を暗示しており、舞台と同じく衣装も原作の時代、雰囲気を与え写実的である。

2. La Scala (1991年1月31日収録)

指揮: Lorin Maasel (1930-) 61歳

演出: Jonathan Miller (Beggar's Opera 演出)

装置: Stefanos Lazaridis

衣装: Sue Blane

Minnie: Mara Zampieri (1977 デビュー) 40代?

Jack Rance: Juan Pons (1946-)

Johnson: Placido Domingo (1941-) 50歳

1911年初演の後前述のマリオ・デル・モナコ以来、27年ぶりにスカラ座に戻ったプッチーニの『西部の娘』は4年ぶりにドミンゴが歌うと評判であった。シーズン開幕オペラの予定であったが、『イドメネオ』となり、この『西部の娘』初日の方が開幕のような熱気であった。しかし初日はジュゼッペ・ジャコミーニとジョヴァンナ・カゾラ（こちらがより好演）の組で、2日目にマーラ・ザンピエーリとドミンゴで事実上2日初日があったような騒ぎ。ドミンゴ、カゾラ組がなかったのは残念。ロリン・マゼールの指揮もいつになくテンポが軽快で生き生きとした音を出し、オペラの手綱をよくコントロールしていた。演出のジョナサン・ミラーとは意気投合し、マゼールもミラー同様アメリカ人であるので意気込んで取り組んだ。西部劇ものの草分けはプッチーニなのだとミラーが言った⁽³⁵⁾。ロリン・マゼールを楽しむために前奏から1幕の最初の方マーラ・ザンピエーリが「ソリガードにいた頃」というミニーの一番いい歌を歌うまでと最終幕の主題の愛の旋律で愛と許しを説くスピントの美声である彼女の歌に注目したい。

3. Metropolitan (1992年4月上演ライブ録画)

指揮: Leonard Slatkin

演出: Giancarlo del Monaco

衣装・装置: Michael Scot

Minnie: Barbara Daniels (1946-) 46歳

Johnson: Placido Domingo (1941-) 51歳

Jack Rance: Sherrill Milnes (1935-) 57歳

Ashby: Julien Robbins (1950-) 41歳

English subtitles: Sonya Friedman

Artistic director: James Levine

1992年シーズン前半の新演出オペラは『愛の妙薬』と『西部の娘』であった。この公演を観た田中一美氏によれば、『西部の娘』がこのシーズンの開幕プレミエでアメリカ人指揮者の中でも特にアメリ

カ的と言われるスラットキンの指揮による『西部の娘』は、主役ミニーを演ずるバーバラ・ダニエルズが、歌唱、演技共に最高だった。特に第2幕、山の中の小屋で、恋人を救うためポーカー、ゲームに挑むミニーのカードさばきは抜群で、その上スラットキン率いるオーケストラがじりじりと緊迫感を追い上げ、はらはらする思いで聴きいった。一方対決する男2人を演ずるミルンズとドミンゴは、それぞれの声の持ち味がキャラクターにマッチし、西部の荒くれ者の男くささたっぶりの歌を聴かせてくれた⁽³⁶⁾。ドミンゴ、スラットキンは1991年に『西部の娘』でメト初演。さらに1992年と同じプロダクションで1993年も『西部の娘』公演があり、ゲーナ・ディミトローヴァ、N.マルティヌッチ主演、指揮C.バデア、演出デル・モナコ⁽³⁷⁾で上演されている。

この92年メトロポリタン版は3種類のレーザーの中で最高でドミンゴが歳で声が割れたり、コヴェント・ガーデン版と比べると容貌が老けたとわかるが⁽³⁸⁾、彼は演技で十分カバーしているし、色男的優しい甘さと盗賊である荒々しい男性的魅力とを表現できるのは今ドミンゴしかない。20年以上もドミンゴと名コンビを組んでいるミルンズの保安官ランスも同じ最高の適役である⁽³⁹⁾。しかもドミンゴの老けたのを補いあまりあってミニー役のバーバラ・ダニエルズが素晴らしい。ミニー役もジョンソン役も高音で強い声が要求され、また演技的にも1幕2幕にわたって約2時間近く二人だけで舞台を支えなければならない。その間、聞かせどころのアリアはなく、それでいて会話のレチタティーヴォにあたる部分でも高音で激情を示す必要がある。一般観客には人気ないが、専門家には高く評価されてきた『西部の娘』の音楽⁽⁴⁰⁾だが、その代わりジョンソンとミニー役に非常に負担を強いるので若くなくては体力的に難しい。聞かせどころのアリアがあればそこを巧みに歌うことにより、他は力を抜くという演じ方もあるし、そう演じるオペラ歌手は多いのだが、これは全編が緊張を強いられるものになっている。又原作ではジョンソンは30才、ミニーはさらに若い設定で、上品に育った男が若気のいたり盗賊になるとか、ミニーはキスしたことのない若い娘とかいう役柄からも若くしなければならない。アリアだけでなく、レチタティーヴォや管弦楽の重要性は人物を示すモチーフがメイン・テーマと背景にも使われ、アリア以外の全編が激しい美しさで語られ、劇と融合している点でワーグナー的といえるかもしれない。ドビュッシーやリヒャルト・シュトラウスの影響⁽⁴¹⁾もとりこんだ意欲的な作曲とされているのも、劇と音楽の融合があるからであろう。ダニエルズは特に2幕のコロラトゥーラのソロに見られるように陽気なアメリカ娘を印象的に演じ、熱演であるし、可愛いくて気の強いアメリカ娘がぴったりである。演出全体もベラスコの初演時の資料が残っているからかもしれないが、原作の喜劇が一番生かされている。それは原作の英文を相当に用いている Sonya Friedman の手になる、英語字幕のせいもある。原作が英米文学の場合、英語字幕は強みであると気づかされた。また『西部の娘』だけは時代背景の考証がアメリカだからこそ完全ということもあるが、革新的な演出で有名なデル・モナコだが、今回は非常に写実的でその装置、衣装、雰囲気もいい。原題の Golden から砂金の金色だけでなく、ヒロインの金髪も象徴的に重要だが、このバーバラ・ダニエルズは場面により、三編みにしたり、女らしく長く垂らしたりと金髪を生かして若く美しい娘らしく演じている⁽⁴²⁾。

このオペラは酒場の女主人、保安官そして彼の追う砂金強盗と典型的な西部劇の人物関係を持つが、原作執筆、初演(1905年)はもちろん、このオペラの初演時(1910年)にはまだ西部劇映画という

ものが存在していなかったわけで、スカラ座の演出家、ジョナサン・ミラーが言う通り、西部劇の草分けと言えるものである。今となってはこの類の西部劇映画は見飽きる程ありその点において物語が陳腐とされるのだが、アメリカ文化の伝統を良しにつけ、悪しきにつけ代表する西部劇を作りだした点はベラスコを評価しなければならない。ヒロイン、ミニーの人物像はプッチーニのオペラ化のために聖母マリアを崇めるイタリアの宗教的特質が混入してきてオペラでは明確でなくなっているが、原作ではピューリタンの伝統にあるヒロイン、ヘンリー・ジェイムスのヒロインのような無垢なアメリカ娘の特質を持っており、アメリカ文化を示すオペラと言わねばならない。いかにもアメリカ的なゴールド・ラッシュ時代の西部を舞台にしている、アメリカ人による(原作)、アメリカ人のための(この比較的知られないオペラが初演以来メトロポリタンだけでなくアメリカ各地で演じられ続けてきた)、アメリカ的テーマのアメリカーナ(アメリカに関する文献資料)として重要なオペラである。

そしてヒロインに関していえば、気の強いアメリカ娘ということが、外国人の眼には強調され、19世紀末のメロドラマの情熱的恋に身を焦がすヒロインの伝統で解釈されてきた。彼女の歌が強い声(スピント)の声質を要求するためこれまで中年の歌手に演じられたことから、日本ではやくざ映画における賭博場の鉄火肌の姐御と重ね併せて解釈されている⁽⁴³⁾。しかし、実は非常に純情可憐なまだ恋を知らないヒロインでそれにアメリカ娘らしい率直さを合わせ持つのであって、スカラ座のマーラ・ザンピエーリの演ずるような激しい情熱的恋から、恋人を母親的にかばうイタリア的なヒロインではない。無垢な娘というアメリカ的特性を持つことが重要である。これまで西部劇によく現われる男勝りの酒場の女でファム・ファタールの魅力も持つヒロイン、又19世紀末メロドラマの激しい運命的に生きる女という間違った固定観念にもミニーは重ね合わせて演じられ続けてきた。そのため生じたこのオペラのヒロインの性格についての誤解がメトロポリタンのヒロインのバーバラ・ダニエルズによって原作に忠実に正されている。

彼女は3点のレーザーの中で最も若く美しい印象を与える演技で、原作の陽気でお転婆だが、しかし純情可憐でピューリタンのような道徳性を持ち、処女性を大切にす娘を巧みに演ずる。「初めてのキスを誰にもあげてない」と第一幕で語り、二幕では「あなたが永遠の自分だけの恋人だと思って最初のキスを与えたのに」と裏切られて悲しみ、しかし瀕死の彼を見ると「最初のキスを与えたあなただから、あなたを愛します、決してあなたを死なせない」と言うように最初のキスが非常に重大な意味を持つこのアメリカ娘のドラマを納得のいくものにしていく。これをマーラ・ザンピエーリのような堂々とした歌手が歌うと、若さと純情を表現せず、聖母マリア的慈愛からキリスト的許しを説くドラマに重点が移り、何をキスに大騒ぎして馬鹿々々しいと滑稽に思われるのである。またこれまでこのキスに関する歌はそうのように評価されてきたのだが、19世紀のアメリカ文学のヒロインとしては無垢、純潔こそ最も高い価値なのであり、これが納得いくように純情に見えるヒロインであることは極めて重要である。これまでの欠陥をこのように克服して旧来の常套的解釈を打ち破っている新演出や各歌手の名唱、名演技がいかにアメリカ的伝統を復元し、初演当時の原作者の演出に従い、原作の味わいを復活したかをみると、このメトロポリタン版のプロダクションは画期的なものである。従って、原作に忠実に立ち帰るといふ、いわば、前進とは逆に見える演出によって今回の舞台の革新が行なわ

れたと言わねばならない。

* * *

本稿は、1993年10月28日 中京大学文化科学研究所研究例会にて口頭発表したものに加筆修正したものである。

[LD 資料]

1. Covent Garden 版 LD (1982年11月12日収録)
指揮: Nello Santi
演出: Piero Faggioni
装置: Ken Adam
衣装・照明: Piero Faggioni
Minnie: Carol Neblett, Johnson: Placido Domingo, Jack Rance: Silvano Carroli
140分 Laser Disc SM158-0104 (パイオニア、1983)。
2. La Scala 版 LD (1991年1月31日収録)
指揮: Lorin Maasel
演出: Jonathan Miller
装置: Stefanos Lazaridis
衣装: Sue Blane
Minnie: Mara Zampieri,
Jack Rance: Juan Pons,
Johnson: Placido Domingo
143分 Laser Disc BVLO 31-32 (BMG ビクター、1992)。
3. Metropolitan Opera 版 LD (1992年4月上演ライブ録画)
指揮: Leonard Slatkin
演出: Giancarlo del Monaco
衣装・装置: Michael Scot
Minnie: Barbara Daniels,
Johnson: Placido Domingo,
Jack Rance: Sherrill Milnes,
Ashby: Julien Robbins,
English subtitles: Sonya Friedman
Artistic Director: James Levine
139分 Laser Disc POLG 1135-6 (ポリドール、1993)。

[註]

- (1) Julian Budden, *The New Grove Opera* Vol. 2, 117-120. 以下のプッチーニと彼のオペラに関する基本的記述は *The New Grove Dictionary of Opera* in 4 volumes, ed. by Stanley Sadie (Macmillan, 1992) により、全て Julian Budden 執筆の項目で、オペラ『西部の娘』はその中の Vol. 2、同じくプッチーニに関しては Vol. 3、オペラ『蝶々夫人』は Vol. 3 の記述に従う。従って以下 *The New Grove Opera* の略号とその箇所(巻数及びページ数)のみにて記す。
- (2) Julian Budden, *The New Grove Opera*, Vol. 2, 118. “the first world premiere ever held at the Metropolitan.”
- (3) その後プッチーニの三部作も初演され、今では世界的初演は当然の歌劇場となっている。

- (4) 浅里公三、「名歌手ライヴァル物語①バヴァロッチェ vs ドミンゴ」、『グランドオペラ I』(東京: 音楽の友社, 1991), 102
- (5) 浅里公三、「メトロポリタン歌劇場の〈西部の娘〉」レーザーの解説, (1993).
- (6) 新発売の折『レコード芸術』その他の音楽誌で取り上げられてもいない。
- (7) David Belasco, *Six Plays: Madame Butterfly·Du Barry·The Darling of the Gods·Adrea·The Girl of the Golden West·The Return of Peter Grimm* (Boston; Little, Brown, and Company, 1929) 以下原作の引用はこのテキストにより、ページ数字のみにて示す。
- (8) Julian Budden, *The New Grove Opera*, Vol. 3, p. 1166.
- (9) 岩元巖・酒本雅之監修『アメリカ文学作家作品事典』(東京: 本の友社, 1991), 614. なお Leiter によれば、ベラスコには Broadway で上演した作品が 123、その生涯において 350 以上の演出作品がある。自作または共作による戯曲執筆は 50 を越える。See. Samuel L. Leiter, *From Belasco to Brook: Representative Directors of English-Speaking-Stage* (New York; Greenwood Press, 1991), 1.
- (10) Lise-Lone Marker, “Foreword” to *David Belasco: Naturalism in the American Theatre* (Princeton University Press, 1975), xii. “. . . the Theater Collection of the New York Public Library, originally founded for the purpose of housing the David Belasco papers.”
- (11) 以下に示す幕毎のページ数により、1、2 幕はほぼ同じ長さ、3 幕はそれに比べ 3 分の 2 の長さ、4 幕は非常に短い終幕と容易に知れると思う。これはオペラ化された時には注目すべき変更をうけることになる。
- (12) Daniel C. Gerould, “The Americanization of Melodrama”, *American Melodrama* (New York; Performing Arts Journal Publications, 1983), 23.
- (13) Daniel C. Gerould, *ibid.*, 24.
- (14) 拙稿「『西部の娘』——変身と変容のドラマ」中京大学教養論叢掲載予定。Vol. 35, No. 1 (1994)
- (15) David Belasco, “A Chronology Placing the Six Plays”, *Six Plays*, *ibid.*, x.
- (16) “a return New York engagement at the old Academy of Music on Fourteenth Street”. See. Montrose J. Moses, “Notes” of *Six Plays*, *ibid.*, 308. 従って高崎保男氏の「スカラ座『西部の娘』レーザー解説」中の「ベラスコ劇場でプッチーニが観劇」という記述は間違いである。
- (17) Julian Budden, *The New Grove Opera*, Vol. 2, *ibid.*, 117. もう一つの作品は *The Music Master* である。
- (18) Julian Budden, *The New Grove Opera*, Vol. 3, 136.
- (19) Julian Budden, *The New Grove Opera*, Vol. 2, 117-8. 高崎保男、「プッチーニ: 歌劇〈西部の娘〉」(メトロポリタン・レーザー解説, 1993).
- (20) D. C. Gerould, *ibid.*, 27.
- (21) D. C. Gerould, *ibid.*, 27. 原作ではめったにミニーという呼称は使われず、町で唯一人の女性として、皆に The Girl と語られ、Girl と呼びかけられる。これは西部劇で西部男たちが the boys と総称され、呼びかけられるのに対応するものと思われる。この “The Girl” をプッチーニはイタリア語化したのである。Johnson さえ初めは Girl としか知らず、第 2 幕で尋ねて Minnie は美しい名だと言う。Johnson の first name “Dick” も、さらにその後おやすみなさいという言葉に名前を添えたくてミニーが尋ねて明らかにされる。
- (22) プッチーニが迷ったという *The Rose of the Rancho* もまた同じ傾向のヒロインを持つ。但し “rancho” という語から知れるように、『西部の娘』とほぼ同時代のメキシコ戦争の結果カルフォルニアがアメリカに併合され、自分の牧場を失いそうになっているスペイン系貴族階級の娘、“The Rose of the Rancho” と呼ばれる娘がヒロインである。彼女は、恋した男が予期せぬことに敵方のアメリカ政府役人と分かり苦しむというミニーと同じ葛藤を示すが、スペイン娘らしい媚態をも見せ、それは同じような状況にあるアメリカ娘ミニーのピューリタンの純潔とは異質なものである。See. David Belasco & Richard Walton Tully, *The Rose of the Rancho* (New York; Samuel French, 1936)
- (23) “a second *Boheme*, only stronger, bolder and more spacious”. See. Julian Budden, *The New Grove Opera* Vol. 2, 118.

- ②4 “Uncle Tom’s Cabin” にならって “Uncle Giacomo’s Cabin” と呼ばれた。See. D. C. Gerould, *ibid.*, 27. 19世紀メロドラマの丸木小屋、自然主義劇場（ヴェリズモ・オペラ）の貧しい庶民の家庭を示す。
- ②5 Julian Budden, *The New Grove Opera*, Vol. 2, *ibid.*, 117-120. 但し所要時間はメトロポリタン・オペラ（1992）のものを記した。
- ②6 Julian Budden, *The New Grove Opera*, Vol. 2, 118. 日本の資料では52回となっている。高崎保男, *ibid.*, 1992、浅里公三, *ibid.*, 1993。
- ②7 浅里公三、「メトロポリタン歌劇場の〈西部の娘〉」レーザー解説1993。
- ②8 Julian Budden, *The New Grove Opera*, Vol. 2, 118.
- ②9 Lise-Lone Marker, *David Belasco: Naturalism in the American Theatre*, *ibid.*, 157-160. 及び Montrose J. Moses, “Notes” of *Six Plays* by David Belasco (Boston; Little, Brown, and Co., 1929), 309.
- ③0 Lise-Lone Marker, *ibid.*, 158.
- ③1 1966年にリンカーン・センターに移った時にも、『西部の娘』はリンカーン・センターの実質上最初の公演として、『アントニーとクレオパトラ』世界初演の前に学生による公演が行われた。浅里公三, *ibid.*
- ③2 黒田恭一、「オペラ『西部の娘』を楽しむ人のためのノート」（コヴェント・ガーデン版レーザー解説, 1983）。つまりレジオ歌劇場初演の後、最初の世界的歌劇場での復活がこのコヴェント・ガーデンということになる。
- ③3 黒田恭一がネブレットの初演が1974年レジオ劇場と記し (*Ibid.*)、『グランド・オペラⅠ』の記事にドミンゴの「西部の娘」初演は1974年レジオ劇場と記されている。浅里公三『グランド・オペラⅠ』, *ibid.*, 102.
- ③4 オペラでは「San Franciscoから来た男みたいだ」と言われるが、実は1850年にCaliforniaがアメリカに併合され州になった時 Sacramentoが州の首都と制定されたのだから、gold rushの昔は Sacramentoの方が San Francisco や Los Angeles より大都会であった。
- ③5 松谷和紀、「1991年海外オペラステージ：ミラノ・スカラ座」『グランド・オペラⅠ』（東京；音楽の友社、1991）、191-2。公演鑑賞記及び評価は、次に引用するメトの92年田中氏のものと同様、『グランド・オペラ』誌掲載の松谷和紀氏の文そのままか、抜き書きの引用であることをお断りしておきたい。
- ③6 田中一美、「1992海外オペラステージ：メトロポリタン・オペラ」『グランド・オペラⅡ』（東京；音楽の友社、1992）、188。
- ③7 「世界の歌劇場 ’92-’93シーズンのプログラム」『グランド・オペラⅢ』（東京；音楽の友社、1992）、113。
- ③8 ドミンゴの声に年齢が現れるのは早すぎると思うが、とりわけこのオペラは後述するように若さが重要なオペラなので、これまで記してきた各公演の主演者、指揮者の年齢に注目してほしい。コヴェント・ガーデン版がよいのはまさにこの点である。指揮者にも若い情熱が必要とされ、初演のトスカニーニは若いし、若いカルーソーも最適で、それ故彼が演じなかったコヴェント・ガーデンやスカラ座ではメト程の観客の熱狂や、専門家の好評を得られなかったのかもしれない。
- ③9 浅里公三、「メトロポリタン歌劇場の〈西部の娘〉」*ibid.*。「この20年ほどの間に成功をおさめた『西部の娘』がいずれもジョンソン役にドミンゴを起用しているのは偶然ではない。彼ほどこの役にぴったりのテノールがいないためであり、成功は声・容姿・演技と3拍子揃ったドミンゴに負うところが少なくない。」
- ④0 Julian Budden, *The New Grove Opera*, Vol. 2, 120.
- ④1 *Ibid.*
- ④2 Danielsは1946年生まれで、この公演時は46才だが、しかし若い陽気なお転婆な娘という感じをよく演じている。
- ④3 浅里公三, *ibid.*